

トロント補習授業校児童生徒の日英作文力の実態

トロント大学名誉教授

中島和子

報告2 「バイリンガル作文力と家庭のあり方」

バイリンガル作文力と家庭のあり方について、調査の結果分かったことを報告したいと思います。前回は、二言語の力関係という観点から4グループに分類しましたが、今回は年齢グループに分けて考えることにしました。ご家庭のあり方はお子さんの年齢によって変わりますし、補習授業校の指導方針も学年とともに変化していくと思うからです。

まず大まかに三つの年齢グループに分けました。グループ(A)は8歳未満、グループ(B)は8から11歳未満、そしてグループ(C)は11歳以上です。書く力からみると、(A)は英語と日本語の文字習得の段階、(B)は日本語、英語それぞれで文章が書けるようになる段階、そして(C)が、漢字力の伸びと相まって書き言葉としての「作文力」が両言語で育つ段階と言えるでしょう。そして、それぞれの年齢グループで、「日本語作文力」、「英語作文力」、「異なり漢字使用数」と「家庭のあり方」との間にどんな関係があるかを調べました。「**日本語作文力**」、「**英語作文力**」には、主成分分析という方法で得た作文の質的評価の総合点、「**異なり漢字使用数**」は異なり漢字を数えたもの、そして「家庭のあり方」は、保護者の皆様にお答えいただいたアンケート調査の各項目をまとめたものです。アンケートの項目とは、お子さんの属性(年齢、性別、渡航年齢、両親日本人家族か国際結婚家族かなど)、言語環境(家庭で親が使う言語、子どもが親に使う言語、親の子どもの学習に対する姿勢など)、そして家庭での読み書き活動(どのぐらいの頻度で読んだり、書いたりするかなど)です。

年齢グループ(A) 8歳未満の児童生徒

最近日本では「定住1.5世代」と言っていて、就労目的で来日したブラジル人や中国人の定住化が進み、その子どもたちの学力の低さが問題視されています。1.5世代とは、日本生まれの子どもと幼児期に来日した子どもの総称です。家で親がポルトガル語や中国語を使っている、子どもが地域の託児所や保育園に通うようになると、あっという間に母語を失い、日本語に移行します。家で親がポルトガル語や中国語で話しかけても、子どもの答えは日本語となり、親子間で通じる言葉がなくなっていくのです。こうなると子どもは情緒不安定に陥り、

学習にも前向きになれず、小学校は何とか卒業できても中学校の半ばぐらいで中退というケースが多いということです。以前から「母語は5歳までに消える！」と言われ、トロント大学のカミンス教授が90年代に調べた調査でも、4歳児でプリスクールに入った時点で英語が一言も話せなかった子どもが、2年後、小学校1年になったときには、80%が英語しか話せない子どもになっており、両言語話せた子どもは3名だけだったということです。この点、補習授業校の場合はどのような状況でしょうか。

まず年齢グループ(A)の全体像ですが、4つのバイリンガル型にもう一つ、両方の言語の力が拮抗している「日＝英中型」を加えて、5つに分類しました。そうすると、日本語も英語も低い「日＝英低型」が43名中9.3%と最も少なく、両言語とも高度の作文を書いた「日＝英高型」が11.6%、そして日本語よりも英語の方が強い「日<英型」が14.0%、日本語の方が英語よりも強い「日>英型」が16.3%、そして両言語が拮抗している「日＝英中型」が一番多く、48.8%でした。「定住1.5世代」の研究では、親の人的資本(学歴、職業、現地語の力など)が低ければ低いほど二言語が低迷し、「日＝英低型」が出やすいと言われていています。この点調査の対象となったトロント補習授業校の児童生徒は、両言語が発達途上にある児童がほとんどで、「日＝英低型」がごくわずかでした。親の人的資本が極めて高いグループと言えます。

では、**日本語作文力**、**英語作文力**、**異なり漢字数**と家庭のあり方は、どのような関係でしょうか。**日本語作文力**と統計的に意味のある関係が見られたのは、(1)「日本語での読書」、(2)「日記などを毎日書く」、(3)「母親への英語使用」の3項目でした。どういうことかということ、保護者の方が例えば(1)を選ばれたお子さんは、日本語作文力の得点が高い傾向があるということです。(2)はどの年齢グループでも作文力と深い関係がありましたが、一番しっかりとした強度の相関関係が見られたのは、年齢グループ(A)でした。(3)の「母親への英語使用」はマイナス要因で、母親に話すとき英語を使う子どもは日本語作文力が低い傾向があったということです。

つぎに**英語作文力**ですが、実際にお子さんが書いた日本語作文を読むと、トロント補習授業校の行き届いた指導のおかげでしょうか、皆揃ってよく書けているという印象を受けたのですが、英語作文の方は個人差が目立ちました。そして実際に英語作文力と関係があった家庭要因は13項目もありました。「英語での読書」、英語で「作文をよく書く」、英語で「日記などを毎日書く」などが

プラスの要因であることはもちろんのこと、それに加えて滞在年数、入国年齢も関わっていました。つまり、トロントの滞在が長ければ長いほど、またトロントに来た時の年齢が低ければ低いほど、英語の作文がよく書けていたということです。また「父の母語が英語」や「父が子どもに英語を使う」が英語作文力にプラスの要因となっていた反面、「日本へ帰国する予定」とか「将来の教育は日本で」などという日本志向型の親の方針は、英語作文力に対するマイナス要因となっていました。

つぎに**異なり漢字数**ですが、「日本語での読書」、「日記などを毎日書く」に加えて、現地校の勉強よりも「補習校の方が大事」という母親の姿勢が異なり漢字数と有意の関係がありました。本をよく読む子は漢字に強いと言われますが、漢字力と読書に強い関係が見られたのはこの年齢グループだけでした。漢字の習い始めの時期に、本を通して漢字に親しむことがいかに大切かということを示唆しているのではないのでしょうか。

以前、4-6歳の日英バイリンガル児が、モノリンガル児と比べて、どんな点が異なるか調べたことがあります。東京池袋の **New International School** という日英バイリンガル学校で「幼児読書力テスト」を使って調べたのですが、バイリンガル児が際立って優れていたのが「図形認識」の力でした。補習授業校と現地校の両方で学ぶ子どもたちは、現地校で筆記体・活字体、大文字・小文字と、4つの違った形のアルファベットを学ぶと同時に、例外の多い、複雑な英語の綴り字を覚えなければなりません。また補習授業校では、表音文字であるひらがなやカタカナに加えて、全く違った学習ストラテジーが必要とされる、漢字の意味、書き方、読み方、使い方を習うのです。ですから、さまざまな図形を見分ける「図形認識」力が強くなるのは当然と言えば当然でしょう。そして英語と日本語のように全く異なる2つの表記法をなんなくこなしてしまう子どもの力は驚嘆に値するものです。バイリンガルに育つということは、認知力や思考の柔軟性にプラス、言語分析に優れ、第3、第4の言語習得が速くなると言われますが、もっともなことだと言えるでしょう。

年齢グループ(B) 8歳から11歳未満の児童生徒

年齢グループ (B) には、「日＝英高型」が89名中14.6%、「日＝英低型」が減って5.6%でした。そして「日>英型」が14.6%、英語の方が強い「日<英型」が22.5%、両言語が同じぐらいの「日＝英中型」が依然として多く、42.7%と半数近くもいました。

前回の報告 1 で、バイリンガル児の 2 言語は、両言語が互助的、あるいは相互依存的関係で育っていくと書きましたが、年齢グループ (B) は、そのような関係が強まる段階のようです。例えば、**日本語作文力**には、「日記などを毎日書く」ことがプラスの要因でしたが、同時に英語作文力にもプラスの要因だったということです。また逆も真なりで、英語で「日記などを毎日書く」ことが日本語作文力にも、漢字力にもプラス要因だったのです。さらに「補習授業校の学年レベル」と日本語作文力、漢字力、英語作文力との間にかなりしっかりした相関関係が見られましたが、「現地校の学年レベル」とも、プラスの相関が見られたのです。このように、2つの作文力が互いに足を引っ張り合うのではなく、学年と共に互いに強め合いながら育っていく状況が見られました。報告 1 で強調したように、英語であれ、日本語であれ、毎日のように「書く」という活動が、バイリンガル作文力全体にプラスになるということが分かります。

英語作文力では、「英語の本をよく読む」との間にしっかりとした相関があり、英語の本を読む子は英語の作文力が高いという傾向が見られました。一方、逆に英語作文力にマイナスに働く要因もたくさんありました。例えば、「日本へ帰国予定」、「よく一時帰国する」、「将来の教育は日本で」など、日本志向型の家庭の方針、また「補習校の勉強の方が大事」、「現地校の勉強の負担が大きすぎる」というような日本語志向型の親の姿勢などが、英語作文力に負の要因となっていました。一方、英語作文力へのプラス要因は1つだけで、それは「補習校の学習も現地校の学習も両方大事」という2言語志向型の母親の姿勢でした。子どもは親の後ろ姿を見て育つと言いますが、言葉に出さなくても子どもは親が望む方向を受け止めているようです。親が「英語の方が大事」とか、「日本語の方が大事」とかいう1言語志向型の姿勢を持っていると、バイリンガルが育ちにくいようです。これまで私自身が手がけた調査でも、親の姿勢が「両言語志向型」であることが、バイリンガル育成にもっとも有利という結果が出ています。

さて**異なり漢字数**ですが、前に触れたように、補習校の学年レベル、現地校の学年レベル、そして日本語で「日記などを毎日書く」などと、しっかりとした相関関係が見られました。英語で「日記などを毎日書く」も弱度ですが、漢字力にプラスの要因となっていました。家庭使用言語では、「親が子どもに英語を使う」や「子どもが父親や母親に英語を使う」が、弱い相関ですが、漢字力にマイナスに働くことが分かりました。つまり、漢字の習得には、家庭の中にし

っかりとした日本語環境を長期にわたって作り出すことが必要だということを意味しているように思います。

年齢グループ(C) 11歳から15歳の児童生徒

年齢グループ (C) になると、両言語とも低い「日＝英低型」が97名中11.3%でしたが、「日＝英高型」は増えて、19.6%でした。そして「日<英型」が25.8%、「日>英型」が20.6%で、両言語が拮抗する「日＝英中型」がぐっと減って22.7%でした。「日＝英高型」は年齢とともに増える傾向がありました。

年齢グループ (A) (B) と同じように、「日記などを毎日書く」ことが、日本語作文力にプラスの要因であるばかりでなく、英語作文力、漢字力にもプラスの要因となっていました。また同様に英語で「日記などを毎日書く」ことも、日本語作文力にも、漢字力にも、プラスの要因でした。さらに「補習授業校の学年レベル」や「現地校の学年レベル」も (B) と同じように、日本語作文力、漢字力、英語作文力と関係があり、特に漢字力にはしっかりと強い相関が見られました。また日本語作文力と漢字力には入国年齢、英語力には滞在年数に相関が見られたのですが、このことから年齢グループ (C) には学齢期の途中でカナダに入国、滞在年数がまだ短いお子さんが多いということが分かります。

以上のほかに**日本語作文力**では、「日本語での読書」が日本語作文力と、「英語での読書」が英語作文力と、有意の関係が見られました。そして興味深いことに、「英語で作文をよく書く」という項目が初めて浮上しました。そしてそれが日本語作文力とも弱度ですが、有意の相関があったのです。前回の報告で、文を書くという活動は、言語を超えて、多面的に相互に影響し合う傾向があると書きましたが、これはその一例です。つぎに、日本語作文力に対するマイナス要因は何かというと、「親が非日本人」、「父親が子どもに英語で話す」、「子どもが父親に英語で話す」などでした。このような家庭英語使用が英語作文力にプラスになるかということ、そのような傾向は全く見られませんでした。

つぎに**英語作文力**ですが、(B) と同様、「英語での読書」と「英語で作文を書く」と「英語で日記などを書く」の3項目と有意の相関が見られました。ここで新しい要因として浮上したのは、男女差でした。女子児童の方が男子児童よりも有利だということです。(B) でもそのような傾向が見られたのですが、それは日本語作文力との関係でした。(C) では、英語作文力に男女差が見られたのです。最近では学校教育における性差の問題が北米で大きな課題となっており、ト

ロント地域教育委員会でも現在さまざまな取り組みをしているそうです。

異なり漢字数ですが、上に挙げたプラス要因のほかに、初めて浮上したマイナス要因があり、それは「英語のテレビをよく見る」でした。さらにしっかりとした中度の相関が見られたのは、「就学前教育」でした。報告1でも触れましたが、海外で育つ幼児を、日本語を使う教育環境に浸ける努力をしたことが、日本語作文力と漢字力に、プラスの要因となって現れたのです。実は、「就学前教育」は (A) か (B) で現れるのではないかと思っていたのですが、予想に反して (C) でした。米国のバイリンガル研究によると、ほっておけば消えてしまう家庭言語をしっかりと維持すると、その効用が小学校5,6年生の学力にプラスとなって現れると言われています。そして家庭言語は少なくとも小学校5,6年生まで継続すべきだということです。この観点から振り返ってみると、土曜日だけとはいえ補習授業校のような教育機関が存在すること、また幼児期に日本語環境を提供してくれるデイケアやナーセリーが地域にあることが、読み書きまでできる高度バイリンガルの育成に実に大きな貢献をしていることが分かります。

本調査では、学校要因が調査の対象外であったため、現地校やトロント補習授業校の作文指導との関係については何も言えませんが、子どもたちの作文を見ていてつくづく思うことは、トロント補習授業校がいかにすばらしい日本語環境を提供してくれているかということです。子どもの読み書き能力は、学校の蔵書数によって決まるとまで言われますが、まずトロント補習授業校の日本語蔵書数が多いこと、さらに多読の奨励、音読大会や作文・意見文発表会など、リテラシーを伸ばすためのさまざまな取り組みを、学校を挙げてやっていると聞いています。このような補習授業校の取り組みが、日本人家庭にも国際結婚家庭にも等しく、貴重な日本語環境を与えていると言えるでしょう。

読み書きまでできるバイリンガルの育成には、ちょうど家庭のなかで、親の姿勢が「両言語志向型」であることが重要であるのと同様に、現地校でも補習授業校でも「両言語志向型」という姿勢のもと、日本語の作文力と英語の作文力を育てることが肝要ではないかと思います。そして、年齢グループ (A) の段階から (B) (C) を通じて長期的構えで、「両言語で書ける子」という自信とアイデンティティを育てる必要があるのではないのでしょうか。

今回は最終回になりますが、報告3「高度な書き言葉を海外でどのように育てるか」についてご報告いたします。

(C)kazuko nakajima 2013